



「人間みんな障害者」

40年前から、生活や就労などの日常活動に支障がある障害を抱えた人たち、なかでも重度の障害を持つ人たちの雇用に積極的に取り組んだ経験を持つ私には、最近の障害者雇用促進への取り組み、障害を持つ人たちへの職業訓練を含む社会進出支援、雇用側である企業への支援、ならびに関連する法整備の進展には目を見張るものがある。その成果として、障害がある人たちに対する社会からの偏見が減少し、障害を持つ人たちの積極的な社会進出が進展していることを大変うれしく思っている。それでも私は当時も今も、“障害者”という言葉とそれと一対に使われる“健常者”という言葉になんとなく違和感を持っている。それでもこの言葉を使わないと一般社会では話が通じがたいことも承知しているので、話や書き物の場合は仕方なくこのような言葉を使っている。

私があるハイテク企業の工場長を務めていた40年前、地域の職業安定所が障害者雇用の促進に取り組んではいたが、今ほどには社会や企業の関心がなかった。せいぜい障害者雇用促進月間になると、県の労働部などが県下の企業関係者を一堂に集めてセミナーを開催するくらいだったと思う。そのため社員130人程度の私の工場が正規社員として、重度の障害を持つ人たちばかりを16-7人も採用して専門職場を作っていたのが目だったのか、テレビ局が取材に来て放送したり、労働大臣表彰をいただいたり、時には障害者雇用促進月間のセミナー講師を依頼されたりした。

そのような場合私は、「障害者に関する問題には2つの悲劇がある」と切り出すのを常としていた。その1つは“いわゆる障害者”といわれる人たちが、その障害がゆえの不自由に、「自分は障害者だ」と

悲嘆に暮れ、あるいは社会の表舞台を避けて生活しようとしていたこと。他の1つは、“いわゆる健常者”といわれる人たちが、自分は障害者ではないという立場から、“いわゆる障害者”を特別な目、差別的な目で見ると、あるいは無関心でいることであった。

私は当時も今も“人間みんな障害者”と認識している。その障害が目に見えるかどうか、日常生活で直接的に不自由があるかどうかの違いが有るだけで、人間はだれもが何らかの欠陥、つまりは障害を持っている。スポーツが不得意な人もいれば、算数や理科が不得意な人、動作が敏捷な人もいれば緩慢な人もいる。日常生活に不自由があるのは本人の問題ではなく、社会の整備、配慮が不十分であるからにすぎない。すべての機能、能力が完全な人間などどこにもいない。“欠陥があるからこそ人間”であり、“完全なのは神様”だけである。さらに今時点で目に見える障害がなく“健常者である”と思っている自分が、いつ事故や病気その他の理由で自分が差別的に見ている“障害者”になるかもわからない。あるいはそのような子どもを持つことになるかもわからない。

私はこの“2つの悲劇”への対応として次のように主張してきた。

まずは“いわゆる障害者”と認識している人たちに対して、「人間みんな障害者。人間である限り誰にでも欠陥がある。まずはありのままの現実を素直に認めて受け入れよう。失ったもの、無いものねだりをして仕方がない。そのようなことに悩みエネルギーを消耗するより、残っているもの、今あるもの、これから伸ばすことができる機能や能力に注目し、それを精いっぱい鍛え、伸ばし、最大限に生

かし、何かの面で一人前になることにエネルギーを使おう」と。

一方で“いわゆる健常者”と認識している人たちには、「だれかがその能力不足のために困っていたら、自分のできること、持っている能力で精いっぱい支援をしよう。さわやかに、当たり前、しかし同情ではなく。

人間みんな障害者。その障害の種類、内容が違っただけ。お互いに自分の持っているものを出し合っ、て、補い合い、助け合うのが人間社会。

このような考えを持つ私は、新入社員の入社式での社長訓示でも次のように訓示してきた。

「新入社員の皆さん、“当社の常識は一般企業の非常識”と公言する当社への入社おめでとう。当社では社員に“欠点を直せ”などと言う気はない。いくら欠点を直しても良いことをしたことはない。人生は有限。その限られた人生の時間を、欠点を直すことになどに使うのは実にもったいない。いくら欠点を直しても良いことをしたことはない。そんな時間があつたら、自分の良いところを生かして良いことすることに充てよう。良いことは行っただけ良いことをしたことになる。

人間は神様ではないから欠点があつて当たり前。しかし人間にはだれにも必ず良い点がある。しかも人間は一度に2つのことを行うことはできない。だ

から常に良い点を生かして良いことをしていれば、悪いことなど出てくる余地、やる時間などない。良い点を伸ばし、生かして、一方的に社会を利用して自分の好きなこととするのではなく、社会とGive & Takeのできる良き社会人になろう」と。

“障害者”，“健常者”などといわず、ないものねだり、欠点探しではなく、だれもがその能力の大小に関係なく、持っているもの、良い点を生かして、社会の維持発展のために参画できる、そんな社会にしたいものである。

付記事項

- ・進工業（株）在職中の1976年、重度身体障害者雇用への取り組みが評価され、工場長を務める長篠工場が労働大臣表彰を受ける（この間、愛知県労働部の要請により、県下企業対象に心身障害者雇用促進のための講演多数）。
- ・1997年6月には、アメリカ滞在中の現地子会社を通じた地域への貢献、功績によりミネソタ州ローズビル市駐日名誉代表に任命され、さらに2003年1月には、ミネソタ州政府貿易局駐日代表に任命される。
- ・2007年4月に、主に知的障害者を対象にした社会福祉法人かしの木会「くず薬学園」（神奈川県秦野市）の評議員を、2009年12月に理事会監事を任命され、2010年4月からは苦情処理外部委員も任命され現在に至る。
- ・2010年4月2日には、東京都教育委員会より都立特別支援校就労支援アドバイザーに任命され現在に至る。
- ・日本各地大学、九州地区教育関係団体、企業ならびに企業団体、各種団体、地方自治体、その他ミネソタ州日米協会、南米コロンビアの大学・企業団体などでの講演多数。

たかせ たくお

略歴

1939年6月 大分県大野郡犬飼町（現豊後大野市犬飼町）に生れる
1958年3月 大分県立大分工業高校電気通信科卒業
1958年4月 日立製作所入社。戸塚工場にて大型コンピュータ開発設計に従事
1960年1月 日立工業専門学院開校と同時に第一期生として電子工学科入学、卒業後研究科へ進学と同時に東京大学工学部へ国内留学。猪瀬博教授に師事
1973年3月 進工業（株）（本社京都、薄膜技術による精密電子部品製造、販売）から日立への要請により工場長として経営支援のため出向
1974年 取締役就任と同時に日立製作所を退社
1979年8月 アメリカ、ミネソタ州に単身で渡り、進工業（株）現地子会社を設立。営業、輸入販売、工場建設と製造、商品開発、経営などに従事。通算6年間滞在。
1987年10月 （株）日本コンピュータ開発（日立系ソフトウェア会社）の緊急事態対応のため転職入社、取締役システム部長に就任
1990年5月 （株）日本コンピュータ開発代表取締役社長に就任
2006年6月 代表取締役社長を退任、相談役最高顧問に就任。現在に至る。